

# 身近な音であそぶ

－附属幼稚園での「音あそびプロジェクト」から－

Playing with Sounds of Surroundings

: Based on the Practice at the Kindergarten attached to Shiga University

林 睦  
Mutsumi HAYASHI  
滋賀大学教育学部

山本 一成  
Issei YAMAMOTO  
滋賀大学教育学部

<キーワード> 音 遊び 表現 幼児 生活

## 1. はじめに

筆者らは、所属先である滋賀大学の幼稚園教員養成科目担当者でチームを組み、滋賀大学教育学部附属幼稚園との連携の下で、領域の専門性を深める幼稚園教諭養成の在り方を検討する研究プロジェクトを行ってきた。プロジェクトでは、5領域に関連する専門領域をもつ大学教員と附属幼稚園教員が合同で研究会や事例検討会を開催し、具体的な保育事例の検討を通して、幼稚園教諭が領域の専門性を深める上で有効となる「視点」を明らかにしてきた(山本ら,印刷中)。各領域に共通する「視点」として、「わくわくする体験のなかにある学びへの着目」「身近な物との関わりや事象の意味を捉える観察力・分析力の向上」「子ども理解の視点を限定しないカリキュラム・マネジメント」という3つのポイントが浮かび上がってきた。また、今後の課題として、領域に関する授業や教育実習を含む教員養成のプロセスのなかで、具体的にどのようにこれらの視点的獲得を目指していくかについて、さらなる検討が求められることが指摘された。

本研究では、これらの一連の研究プロジェクトを受けて行われた、領域「表現」に関する教育実践について報告する。先述した研究で、表現領域については、主として以下のような視点の重要性が指摘された。

まず、幼児期の表現が既成概念にとらわれない自由なものであり、それらの表現を大人の側が肯定的に受け止め、共有するという点が挙げられる。大人の側がさせたい表現をさせるのではなく、自由に表現することの楽しさや面白さを共有し、子どもとともに表現の喜びを見出していく視点である。

次に、自分なりの感覚を丁寧に味わう土壌を通して、自己の感覚を形成していくという点である。0歳の乳児がひたすら缶を転がしながらその音や動きを集中して見つめることがあるように、大人の目から見ると一見とりとめないように見える遊びのなかに、子どもの感覚的な探究が生じていることがある。保育の日常の中でそのような子どもの姿に気づき、またそれを自己の育ちの場面として捉えることができる視点が求められる。

最後に、技能の習得にとらわれず、感覚を研ぎ澄ませることや表現を楽しむこと、感動を共有することといった感性的側面を重視するという点である。表現領域の学びを技術的な観点からのみ捉えてしまうと、感性を育むことがもつ人間形成的な意義を見過ごすことになってしまう。「幼稚園教育要領解説」において感性は「人格形成の基礎を培う」ものとして位置づけられている。身近な環境と出会い、心を動かし、それを表現する経験を重ねることで感性が育まれ、「自分の存在を実感し、充実感を得て、安定した気分で生活を楽しむ」ことができるようになる(文部科学省 2018)。このことはひとりひとりの子どもの感性へ向けられる視点の重要性を示していると言えるだろう。

これらの視点は、これまでの幼稚園教育要領の改訂の歴史のなかで見出されてきた「子どもの生活」と「子どもの内発性」に沿った経験内容という方向性に即しつつ、さらなる子どもの創造的探究を支援する保育に向けられたものとして位置づけることができる。

石川眞佐江が指摘するように、1989年の幼稚園教育要領の改訂において「音楽リズム」の領域が廃止され「表現」が新設された背景には、「音楽リズム」の指導が能力目標に囚われることで、生活のなかでの音への感性や興味を育む方向へ向かわずに、小学校の準備教育のようになっていったことへの懸念がある。そこで1989年の改定では、全体として幼児教育が、「遊び」を中心とし、「環境」を通して行うものであることが明示されるとともに、領域「表現」では、幼児が日常生活の中で、周りのものや人との音楽的なかわりを通して獲得している音楽行為を大切にする視点が提示され、幼児の自然発生的な自己表現を受け入れることを重視する方向への転換がなされた。それは、言い換えれば、「幼児の自発的な活動を彼らの表現と捉え、内発的行動の表出に重点を置く」ことを意図した改革であったということが出来る(石川 2013)。

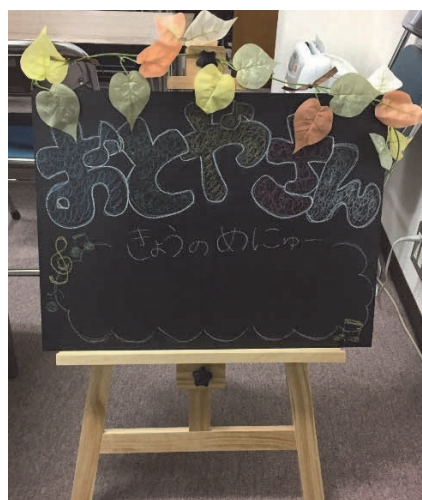
この基本的な方向性は、2018年での改訂でも引き継がれ、「表現」の領域では豊かな感性を養う際に、「風の

音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」という記述が追加された。ここでも幼児が自ら環境と出会い探究することの意義が強調されており、保育者はこのなかで生まれてくる幼児の表現を支える役割を担っている。このような幼児の探究と表現を支える際に、先に示されたような幼児自身が「感覚を味わうこと」や、そこから生じる「自由な表現を共有すること」といった、感性的な側面への視点は、欠かすことができないものとなっている。

以上のような背景から、より具体的な保育実践・保育者養成の在り方を探っていくために、附属幼稚園との協働に基づく、一連の活動から成る「音あそびプロジェクト」を行った。以下では具体的にそれらの取り組みを紹介し、その実践的な意義について考察していく。

## 2. 実践の概要と研究方法

本実践は、滋賀大学教育学部附属幼稚園で、日常生活の中での音に耳を傾け、興味を持ち、新たな発見や表現を育むことを目的として行われる「音あそびプロジェクト」である。まずプロジェクトの皮切りに、子どもと音との意識的な出会いを設定したかったので、打楽器奏者を招いて、楽器だけでなく料理に使うボウルのような日用品や竹といった自然物を使った演奏を含むリズムのワークショップを5歳児2クラス対象に実施した。その後、音に耳を傾ける機会が子どもの日常になるようにと考え、2020年11月から毎週1回火曜日に、滋賀大学教育学部の音楽教育専攻と幼児教育専攻の教員と学生による「音屋さん」を自由遊びの時間の環境に設定することにした。この音屋さんは音を売る店のようなイメージである。幼稚園テーブル2つに音符柄のテーブルクロスをかけ、そこに毎回のテーマに応じた視覚的にも美しく、楽しい、わくわく感を引き出すようなさまざまなモノを子どもの動きを考えて配置し、学生2、3人が一人ひとりの子どもの興味や遊びの様子を見ながら臨機応変に対応する。これまで3回の音屋さんを実施し、学生らが考えたテーマを設定するのだが、第1回は「ボウルとビー玉」、第2回は「秋の音」、第3回は「新聞紙」とした。(今後は「オノマトペ」「体の中の音」などを予定。)音屋さんの開店に際して、幼児教育専攻の3年生2名が音屋さんの看板を作ってくれた。普段カフェが好きな二人がカフェ看板に「おとやさん〜きょうのめにゅー〜」と書いてくれた。今日のメニューのところには、「あきのおと」「しんぶんし」など、その日のテーマを書くことができる。この看板が音屋さんが開店している目印となり、興味を持った子どもたちが自然と集まって来ることになり、文字の読める子はその日のテーマを知ることでもできた。また、普段使っている幼稚園テーブルに音符柄のテーブルクロスを掛けて、非日常を演出することもまた学生のアイディアである。



【写真1：音屋さんの看板】

研究の方法であるが、学生らが音屋さんをしている際に、筆者ら教育学部教員2名(林：音楽教育、山本：幼児教育)がビデオや写真を撮影し、子どもたちの様子を記録する。加えて音屋さんの実践後に、学生、教育学部教員のほかに附属幼稚園副園長を交えて振り返りが話し合われる。さらに学生らが実践の際の子どもの反応や気づいたことなどをレポート形式で提出、ビデオや写真の記録とあわせて考察することとした。次節では、それぞれの活動の内容と学生の振り返りを詳しく記述し、考察していきたい。

## 3. 活動の内容と実施後の振り返り

本節では、打楽器のワークショップ、音屋さん第1回から第3回について、それぞれの実施内容と振り返りについて見ていくことにしよう。

### 3.1 打楽器のワークショップ

「音あそびプロジェクト」の始まりを印象づけるべく、子どもと音との意識的な出会いを設定する目的で、打楽器奏者を招いてワークショップを行った。(2020年10月19日)対象は5歳児2クラス、ひとクラスずつ、それぞれ30分程度実施した。なかよしホールの真ん中に木琴と小太鼓、机の上に小さな料理用のボウルが2つ、布をかけて置いてある。それらを囲むように、半円形に置いたひな壇3段の上に子どもたちが座っている。招いたのは、小学校や特別支援学校などでの訪問演奏やワークショップの経験が豊富な打楽器奏者の可児麗子氏である。

まず担任の先生のお話に従って、子どもたちが「可児さ〜ん」と呼ぶと、ホールの小部屋から可児さんがタンバリンをロール打ちなど派手に叩きながら出てくる。子どもたちの前で挨拶した後、普段子どもたちが弾いている木琴で「アンパンマンのテーマ」を演奏し、同じ木琴でもこんなにきれいな音が出るのかと耳を澄ませた子どもたちであった。次に小太鼓のいろんな部分をさまざま

な奏法で演奏し、ひとつの楽器でもたたく場所や奏法でいろいろな音が出ることが示された。その次に小さな料理用のボウルを両手に持って机に打ち付ける現代曲が演奏され、楽器でなくても音楽できることが伝えられた。



【写真2：打楽器ワークショップの様子】



【写真3：トガトンの音に耳を澄ます】

後半は子どもたちの参加ができるようにした。竹を一節残して切っただけのトガトンという楽器を可児さんが少し演奏してみる。続いて24人の子どもたちを4人ずつ6つのグループに分け、それぞれのグループに先生や学生がついて、トガトンのいろいろな鳴らし方をグループごとに見つけてみた。さまざまな大きさのトガトンをマトリョーシカのように入れ子にするグループ、トガトンを横にして転がして音を出すグループ、巨大なトガトンを塔のように真ん中に立てて小さなトガトンで複数人で叩いたグループなど、楽器としてだけではなく、視覚的にもおもしろい形にしたことが、小学生とはまた違った発想だと思った。最後にグループごとの叩き方をつないで、クラスの音楽をつくって終わった。

### 3.1.1 打楽器ワークショップの振り返り

同じワークショップを2回、年長ひとクラスずつ行ったのだが、最初のクラスで子どもたちの意見を打楽器奏者がたくさん聞こうとしたところ、子どもたちがどんど

ん言葉で表現して収集がつかなくなったため、2回目は子どもたちに問いかける言葉を少なめにしたところ、流れがスムーズになった。またグループ活動の時、最初のクラスでは他のグループのトガトンの音を静かに聞いてほしい時も自分のトガトンを鳴らしてしまっただけで耳を澄ませにくかったので、2回目のクラスではグループの真ん中にカゴを置いて、自分たちが演奏しない時はカゴにトガトンを入れる約束をしたところ、他のグループの音に聞き入ることができた。

いろいろな音を楽しむことができたワークショップであったが、子どもたちにとってはお客さんが来てイベントを楽しんだという認識だろうなと感じた。そこで、毎週いつもの自由遊びの設定の中に音で遊ぶ場ができて、人がいて、子どものペースで音を楽しむことができないか、そしてその姿を見取るような活動を日常に落とし込むことができないかと考え、音を売る店、音屋さんの活動が始まった。

### 3.2 音屋さん（第1回：ボウルとビー玉）

第1回の音屋さんの活動は、2020年11月10日の9:30～10:30、自由遊びの時間に附属幼稚園で行われた。幼稚園テーブル3つに大小さまざまな大きさのボウルやザル、陶器の小鉢とビー玉やピンポン玉、マレットなどを配した。音楽教育専攻の学部4回生2名、大学院生1名がそれぞれ1つのテーブルをつかってお店を並べている。今回のテーマである「ボウルとビー玉」は、4回生の学生のうちの一人の発案による。この学生は大学では作曲専攻で現代作品のパフォーマンスを実施したり、中学校の創作の授業の研究をしたり、吹奏楽部で打楽器を担当したりしていて、普段からおもしろい音さがしや音づくりを追究している。ボウルにビー玉を入れてグルグルとボウルを回すと遠心力でビー玉が回り出し、不思議な音がすると動きも楽しいので、生活の中のモノを使った音あそびとしては子どもの興味をひくのではないかという彼女の発案で、第1回のテーマとなった。音の違いを楽しむために、大小さまざまな大きさのボウルやザル、陶器の小鉢など質感の違う器、またこれらのボウルや器を叩いて遊ぶためのマレットも用意した。副園長から、様子をみてお店をピロティーの表通りに出したり、通りの部屋の中に設営したりして、数名の子どもで静かに集中して遊ぶか、たくさんの子どもの目につくところで大きな音を出してもよい遊びかで調整することができるとアドバイスもらった。最初はピロティーに面した絵本室の中でお店をひっそりとスタート、絵本室の前に置かれた看板を見つけて次々と子どもが入ってきて、それぞれのテーブルに並んだもので遊び始め、友だちや学生のお姉さんとの会話を楽しんでいる。学生らは子どもの遊びを見取りながら、子どもの関心が音のおもしろさに向かうように、でもアドバイスや指示になりすぎないように、なさりげないやりとりをゆったりと楽しんでいる。そこに筆者ら教員2名がビデオやカメラを



撮影しながら記録しているという状況であった。最初は主に 5 歳児が、お店ができたことを嗅ぎつけて合計 10 名程が次々とやってきて遊んだ。5 歳児は、ボウルや器の中でビー玉やピンポン玉を上手に回すことができた。そのおもしろさにはまる子どもも数名いて、いろんなボウルや器を試してずっと遊んでいる子どもも数名いた。



【写真 4：ボウルやビー玉であそぶ 5 歳児】

後半はお店をピロティーに移動してみた。年中児の教室の前だったこともあり、今度は年中児でいっぱいになった。ボウルの中にいろいろな玉を入れて器用に回していた 5 歳児が多かったのに比べて、4 歳児の興味はマレットでいろいろな大きさのボウルを叩くことが中心であった。ボウルにビー玉を入れて回すよりも技術的に易しく、マレットで叩くと大きな音も出るのでわかりやすかったのかもしれない。中にはボウルの大きさで音の高さが変わることを見つけ、床にさまざまなボウルを並べて叩いてあそぶ姿も見られた。



【写真 5：大きさの違うボウルを並べて叩く 4 歳児】

次に子どもと直接かかわっていた学生らが見取った子どもの様子を挙げて、活動を振り返ることにしよう。

### 3.2.1 音屋さん（第 1 回）の振り返り

学生の事後のレポートなどから、活動で見られた細か

な子どもの遊びや表現の要素を箇条書きにして挙げていくことにしたい。

- ・網目の粗いボウルに大きいビー玉をひとつ入れて回す
- ・ボウルに机の上のビー玉をたくさん入れて左右に交互に傾ける
- ・片方に寄る様子を目で見て体を傾ける
- ・中くらいのボウルにビー玉を複数入れて上下に振る。「ザッザッ」という音を楽しむ
- ・「シャー」という音を聞いて、「雨が降っているみたい」と言う
- ・プラスチック製のザルに大きいビー玉をひとつ入れて「カラカラ」という音を聴く
- ・小さいボウル二つ用意してそのうち一つにビー玉をひとつ入れて机の上に伏せる。「どっちにあるでしょうか」「どっちに大きいビー玉が入っているでしょうか」というあそびで延々あそぶ
- ・ビー玉をマレットで叩く
- ・陶器の器をひっくり返して中心部をマレットで繰り返し叩く
- ・小さめのボウルにビー玉をたくさん入れても回らないことに気づき、ビー玉をだんだん減らしていき、回る個数まで減らす
- ・ビー玉をボウルの中で回して早くなったら喜ぶ
- ・ビー玉回し、最初は手をたくさん動かしているが、動かそうとしない方が回ることに気づく
- ・ビー玉が回ったまま机の上においてとまるまで眺める
- ・ビー玉がずっと回り続けることに驚く
- ・ビー玉はテレビの中で見たことがあると言う
- ・ビー玉の複数入ったボウルをゆすり、自分も体をゆする
- ・大きさの違うボウルをひっくり返して叩く。複数のボウルを床にならべて叩いてあそぶ

上記のような様子から、子どもが音のちがいやそのおもしろさ、ビー玉の回し方などを工夫しながらあそんでいる様子が読み取れる。

次に、事後の振り返りの話し合いやレポートに書かれた反省点についてまとめてみたい。さらに工夫できる点として、以下のような点が挙げられた。

- ・ボウルの質感をさらにいろいろ用意するとよい。特に陶器、ザルはおもしろかった
- ・マレットを用意せず、いろいろなボウルの鳴らし方を考えてもらうのも音と向き合うことになり、またよかったのではないかな
- ・ボウルをマレットで叩くと結構大きな音がするので、マレットの種類をソフトなものにした方がよい

金属のボウルをマレットで叩くとかなり大きな音がして、後半にピロティーにお店を移してからには特に、音に耳を済ますという感じではなくなってしまった。よって次回からは、もう少し繊細な音の出るものにしようという意見に落ち着いた。

### 3.3 音屋さん（第2回：秋の音）

11月から始まった音屋さんの活動で是非やってみたかったテーマは「秋の音」だ。滋賀大学のキャンパスや附属幼稚園の園庭は自然が豊かで、紅葉が美しく、どんぐりなどもたくさん落ちている。こういった秋らしい自然物を使って音を楽しめないかと考えた。

附属幼稚園での音屋さんに先だって、滋賀大学の「子どもの表現Ⅱ（指導法）」の授業時間に（2020年11月12日1限）、まずはキャンパス内の「秋さがし」を学生たちと行い、集めてきた落ち葉やどんぐり、枝や小石などをつかって音楽を4、5人ずつのグループで30秒から1分程度の音楽をつくった。紅葉した葉っぱのついた枝を神主さんのように振ったり、どんぐりを紙コップや小さい紙袋に入れて鳴らしたり、それらの音を効果的に組み合わせた音楽ができた。自然物の音の組み合わせそのものを楽しむ音楽、鳴らした自然物の配置にも気を配ってインスタレーションのような作品に仕上げたものなどがあつた。この時学生らが集めてきた自然物を附属幼稚園に持って行って音屋さんのお店に並べることにした。



【写真6：学生が拾った秋の自然物】

この授業で学生とあそんでみてわかったことは、自然物だけでは音が出にくいので、小さな紙袋や紙コップなどを合わせると、中に自然物を入れたりして音を出しやすいということであつた。また紙類と合わせるとそれほど大きな音が鳴り響かず、耳にもやさしいことがわかつた。

2020年11月17日（9:30-10:30）、「秋の音」をテーマとした附属幼稚園での音屋さんでは、二つの幼稚園テーブルの上に落ち葉や紅葉した葉がついた木の枝、大小さまざまなどんぐり、大きな松ぼっくりなどをそれぞれトレイなどに入れて配し、さらに小さな紙袋やコップ、セロテープ、色マジックなども置いておいた。音楽教育専攻の学部4年生2名、大学院生1名が参加した。「落ち葉に埋もれてみたい！」という学生のアイデアをも

とに、ふたつのテーブルの間にレジャーシートを敷き、その上にゴミ袋3杯分のきれいな落ち葉を附属幼稚園で当日朝に用意してもらって敷き詰めた。

目にも美しい秋の自然物に誘われて、次々と子どもたちがやってきた。主に5歳児が来て、葉っぱをこすりあわせたり、どんぐりを紙袋や紙コップに入れて振ったり、どんぐりの笠をタワーのように積んだり、紅葉した葉っぱについた枝を振ってシャンシャンという音を楽しんでいた。

さらにビニールシートに落ち葉を敷いたコーナーでは、落ち葉を踏みしめることに始まり、徐々に落ち葉の絨毯の上に乗って友だちとあそび始め、最後は「せーの！」のかけ声で落ち葉をつかんで上に舞上げるというあそびを繰り返して大いに盛り上がっていた。最後は落ち葉の片付けまで手伝ってくれた5歳児であつた。



【写真7：秋の自然物の音を楽しむ】



【写真8：落ち葉の絨毯であそぶ】

#### 3.3.1 音屋さん（第2回）の振り返り

「秋の音」をテーマとした音屋さんで遊んでいた子どもの様子を学生の事後レポートなどから、箇条書きにして挙げてみたい。

- ・葉っぱで小さいどんぐりを包み、手に持って揺らし、小さな音を鳴らす
- ・コップにどんぐりをひとつだけ入れて揺らす



- ・コップにどんぐりをひとつだけ入れて、もう一つコップをかぶせて振る
- ・コップにどんぐりを複数入れて上下に振る
- ・枯葉を指でこすってちぎる
- ・枯葉を破ってちぎる
- ・大きい松ぼっくり同士を擦り合わせる
- ・大きい松ぼっくり同士を叩くように打ち付ける
- ・どんぐりを紙袋に入れて振る
- ・どんぐりを手ににぎって振る→音が出なくて、ドンガラを増やす
- ・どんぐり同士を打ち合わせる
- ・落ち葉を踏みしめる
- ・落ち葉の絨毯の上にしゃがんでジャンプする
- ・落ち葉を手で押す
- ・落ち葉にダイブする（助走あり・なし）
- ・ブルーシートからはみ出た葉を戻そうとする
- ・落ち葉を紙袋に入れてふる→入れすぎは音がしなくて減らす
- ・笠をどんぐりにかぶせる
- ・笠を積み重ねてタワーをつくる
- ・笠をすり合わせる
- ・葉っぱ付きの枝を左右に揺らす
- ・葉っぱ付きの枝の大きさによって音が変わるか比較する
- ・紙コップの側面同士を打ち合わせる
- ・紙コップの底同士を打ち合わせる
- ・どんぐりの入った紙コップをもう片方の紙コップの底で叩く

上記のような様子が見られた。事後の振り返りの話し合いでは、秋の音は季節を十分に感じられ、目にも美しく、子どもたちにとって魅力的なテーマとなったこと、自然物と紙で耳にやさしい音であったという感想であった。副園長より「どんぐりや松ぼっくりなど、子どもたちが活動で使ったものをお土産で持たせると、子どもたちの間で音屋さんの話題が広がる」とのアドバイスをもらった。自然物と合わせた紙の音もよかったという感想から、今回は新聞紙をテーマとすることにした。

### 3.4 音屋さん（第3回：新聞紙）

第3回の音屋さんは、2020年11月24日9:30～10:30の自由遊びの時間帯に附属幼稚園で行われた。音楽教育専攻の学部4年生2名が参加した。大きな段ボールを2つと新聞紙をたくさん用意した。そして、その新聞を破ったり、クシャクシャにしたりしたものを段ボールに放り込んでいった。そして、その中に入って足踏みしたり、プールのように友だちと身をひたして遊んだりしていた。

5歳児クラスの横にお店を出したからか、5歳児ばかりが来た。新聞紙プールに入りながら、きれいな色刷りの記事を眺めたり、「英語のBって文字が書いてあるね」と大人に見せにきたり、アメリカ大統領の写真をを見つけ



【写真9：新聞紙をちぎってあそぶ】



【写真10：新聞紙プールの中でちぎる、見る】

たりして、興味は新聞の文字や写真、絵にも及んでいた。子どものあそびは音や表現だけでなく、文字や色、かたちなど、さまざまなモノやコトとつながっていて不可分だと感じた。新聞の文字や絵や写真に注目する静かな時間があったかと思えば、最後は新聞紙プールの中で、友達とプールの中の新聞紙をパーッと上に投げて振ってくる新聞をかぶるという遊びを心行くまで繰り返していた。

#### 3.4.1 音屋さん（第3回）の振り返り

第3回の音屋さんで見られた子どもの姿を子どもの様子を学生の事後レポートなどから箇条書きにして挙げてみたい。

- ・新聞紙1枚を丸く丸める
- ・新聞紙数枚を腕と腹を使って圧縮する
- ・新聞紙一枚を細くちぎる
- ・新聞紙を丸く丸めたものを投げる
- ・段ボールの中に新聞紙の束を入れる
- ・机の上に積んだ新聞紙をグーまたはパーでたたく
- ・新聞紙プールのなかに入り、足で踏み
- ・新聞紙プールの中に入り、段ボールの側面を叩く
- ・新聞紙プールの中をかき混ぜる
- ・新聞紙でつくった紙鉄砲の音に反応する

- ・新聞紙一枚を振る
- ・新聞紙数枚を重ねて分厚い紙飛行機を折る
- ・新聞紙プールが壊れたところをガムテープで補修してと頼み、補修を手伝う
- ・新聞紙プールからあふれ出た新聞紙をプールの中に戻す
- ・新聞紙プールに顔を突っ込む
- ・新聞紙プールに入っている友達の身体に新聞紙をかけて布団代わりにする
- ・新聞紙プールを電車に見立てる
- ・新聞紙プールの側面の隙間に新聞紙を詰める
- ・丸めた新聞紙を鞠のように扱い、ポンポンと音を立てる
- ・ちぎった新聞紙の中の絵や写真、文字を眺めたり、読んだりし、その内容について友達と話す
- ・「ビリビリ」「パンっ」というような擬音語をよく口にしていた

事後の振り返りでは、音屋さんも3回目となり、子どもたちに認知されるようになってきたことが話題になった。開店の準備をしている段階で寄ってきて、「あっ、音屋さんが来た！」と子どもたちが集まってきた。そして、「先週の秋の音の後、きれいな葉っぱをひろったよ」「今日はなにをするの?」「今日も秋の音がいいな」とか「今度は冬の音をやってよ」と話しかけてきた。そして「手伝うよ」と言って、新聞を運んだりして、開店準備を複数の5歳児が手伝ってくれた。そして開店すると真っ先に遊び始め、音屋さんが音に着目する場であることを理解していて、新聞紙をまずはちぎったり、クシャクシャにしたりして、いろんな音が出るねと話すが見られた。

3回にわたる音屋さんの活動から、音に着目し、音に耳を澄ましてみよう、鳴らし方でいろんな音がすることを見つけるといった姿が見られるようになってきた。

#### 4. 考察とまとめ

以上、これまで取り組んできた「音あそびプロジェクト」について、活動の生成過程や子どもたちの反応、学生のアンケート結果をもとに記述してきた。本プロジェクトは領域「表現」において重視される子どもの経験内容や、それを支援する保育者の専門的な視点が随所に見られる実践となったといえる。

繰り返すが、領域「表現」では、「子どもの生活」と「子どもの内発性」に沿いながら、身近な自然や素材との出会いを通して子どもの創造的探究を支援する方向性が目指されている。特に音楽的な活動としては、技能の習得にとらわれすぎず、一人ひとりが自由に感性を発揮しながら表現を楽しんでいくことが重要であると考え。河内(2019)は、子どもの音楽活動といえば歌唱や合唱、手遊びなどを連想しやすいが、それらを本当の意味で楽しむためにも音楽活動以前に、音との大切な関わり(出会い)が多くあるのではないかと述べている。本プロジェクトの進行の過程では、回を重ねるにつれてそのような

経験の機会が子どもたちの日常に浸透していつている。特に第3回目では、「音屋さん」という存在が子どもたちのなかに定着し、前回の経験とのつながりが想起されたり、次の活動への期待や提案が子どもたちの側から示されたりしていることが読みとれる。初回の打楽器奏者の演奏に触れる機会から一貫して、「日常の生活の中で音に耳を傾け、興味を持ち、新たな発見や表現を育む」というねらいの下でのプログラムが用意されたことによって、ボウル、器、ザル、ビー玉、落ち葉、どんぐり、新聞紙、といった身近な素材から出る音を探索したり、素材を組み合わせたりすることを楽しむ経験が子どもたちのなかに重ねられていったと考えることができる。

このような経験の蓄積が可能になっているのは、身近なものをを用いてどのように子どものわくわくする活動を生み出していくかという、教師の側の視点が働いていることも重要である。参加学生のアンケートに見られるように、音屋さんを実施する学生自身が身近な素材がどのように子どもたちの感性的な探究を導いているかを丁寧に関与観察し、子どもたちの反応を次の音屋さんに向けて活かしていこうとする姿が見られている。また、3回にわたる音屋さんのテーマや方法はすべて参加した学生のアイディアを生かしたものであり、これまで大学の専門教育の中で培われた「表現」領域ならではの専門的な視点から、音の「やさしさ」や「質感」、素材の面白さや鳴らし方といった知識や経験を生かして子どもの音との出会いを支援していた点で、教師教育の取り組みとしても有効な実践でもあったといえる。

本プロジェクトは子どもたちと関わる実践のなかで領域「表現」の新たな可能性を探究しつつ、それらの取り組みを教員養成にも還元していくという点で、ひとつの有効な手法を示すことができたのではないかと。

※本研究は滋賀大学研究倫理委員会の承認を得ている。  
(承認番号:A200305)

#### 謝辞

滋賀大学教育学部附属幼稚園副園長 西村佳子先生をはじめ、教職員の皆様にお礼申し上げます。なお、本研究は滋賀大学教育学部プロジェクト『『領域』の専門性を深める幼稚園教諭養成の在り方について』の研究の助成を受けています。

#### 文献

- 石川眞佐江 2013 「幼稚園教育要領における音楽活動の位置付けの歴史的変遷—領域〈音楽リズム〉から領域〈表現〉への転換を中心に—」『静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)』第44号 97-110
- 河内奈穂 2019 「子どもと「音」との関係性について(1) —子どもが「音」と出会う経験の意味」『松山東雲短期大学研究論集第50号』p.34

文部科学省 2018 「幼稚園教育要領解説」

山本一成・菅眞佐子・山田淳子・石川俊之・森太郎・渡  
邊慶子・高澤茂樹・林睦・西村佳子 印刷中 「5  
領域の専門性を深める幼稚園教諭養成に向けた大学  
と附属幼稚園との連携—健康・環境・表現領域に求  
められる専門的事項を捉える視点」『滋賀大学教育  
学部紀要第 70 号』